

3. 「小児のアレルギー疾患保健指導の手引き」の改訂

研究分担者 足立 雄一 富山大学医学部 学術研究部医学系 小児科講座 教授
貝沼 圭吾 国立病院機構三重病院 臨床研究部研究員
森田 久美子 東京都立小児総合医療センター アレルギー科
長尾 みづほ 国立病院機構三重病院 臨床研究部長
藤澤 隆夫 国立病院機構三重病院 名誉院長

研究協力者 加藤 泰輔 富山大学医学部 学術研究部医学系 小児科講座
伊藤 靖典 長野県立こども病院 小児アレルギーセンター長
草川 剛 東京都立小児総合医療センター アレルギー科
山田 慎吾 国立病院機構三重病院 小児科
岩井 郁子 国立病院機構三重病院 小児科
高瀬 貴文 国立病院機構三重病院 小児科
金井 怜 国立病院機構三重病院 小児科
有馬 智之 国立病院機構三重病院 小児科
西田 敬弘 国立病院機構三重病院 小児科
田野 成美 大阪狭山食物アレルギー・アトピーサークル Smile・Smile
三橋 静香 横浜市こども青少年局こども家庭課

研究要旨

アレルギー疾患のアンメットニーズは乳幼児期に多いと考えられるが、それに応える保健指導を円滑に進めることを目的に、平成30年度厚生労働行政推進調査事業補助金（厚生労働科学特別研究事業）「アレルギー疾患に対する保健指導マニュアル開発のための研究」（研究代表者：足立雄一 富山大学大学院医学薬学研究部小児科学講座教授）において「小児のアレルギー疾患保健指導の手引き」（以下、「手引き」とする）が作成され、各自治体へ周知が行われた。しかし、この「手引き」の効果については明らかではない。そこで、本研究では、各自治体において乳幼児の保健指導を行う部署を対象に、「手引き」の活用状況並びに問題点について調査を行い、アンメットニーズに応えるべく「手引き」の改訂を行った。本年度は無作為抽出した529の自治体に送付したアンケートの結果を集計／解析して、それをもとに「手引き」を改訂した。

A 研究目的 幼児期に多いと考えられるが、それに
アレルギー疾患のアンメットニーズは乳 て保健指導を円滑に進めることを目的に、

平成 30 年度厚生労働行政推進調査事業補助金（厚生労働科学特別研究事業）「アレルギー疾患に対する保健指導マニュアル開発のための研究」（研究代表者：足立雄一 富山大学大学院医学薬学研究部小児科学講座教授）において「小児のアレルギー疾患保健指導の手引き」（以下、「手引き」とする）が作成され、各自治体へ周知が行われた。この「手引き」作成にあたっては、先に保健指導の担当者を対象とした調査が行われ、何が指導の現場で求められているかの可視化がなされたが（加藤泰輔 他 わが国における小児アレルギー疾患に対する保健指導の現状に関する検討. 日本小児アレルギー学会誌 2021;35:94-100）、「手引き」配布後には調査がなく、その効果については明らかではない。そこで、本研究では、各自治体において乳幼児の保健指導を行う部署を対象に、「手引き」の活用状況並びに問題点について調査を行い、アンメットニーズに応えるべく「手引き」の改訂を行うこととした。

B 研究方法

前年度に、「手引き」の活用状況と現場でのニーズを明らかにするための調査項目を決定し、アレルギー疾患の保健指導の実施状況、保健指導をする疾患、指導マニュアル（独自のものも含む）の整備状況、「手引き」の利用状況（全般、よく用いる項目など）を調査したので、回答を集計し、「手引き」についての評価、要望、保健指導における問題点を明らかとした。

これをもとに、「手引き」の改訂を最新の医学情報を取り入れながら、実施した。本研究の研究分担者、研究協力者がそれぞれの章を担当、全体での協議を重ねて、最終版と

した。

C 研究結果

自治体アンケートの集計結果は資料 4 に示す。521 箇所に送付して 275 箇所（52.8%）より回答を得た。回答した自治体の中で、アレルギー疾患に関する指導を行っていたのは 89.1%で、指導内容は食物アレルギー、アトピー性皮膚炎が多く、発症予防がこれに続いた（図 1）。

図 1 保健指導しているアレルギー疾患



アレルギー疾患の保健指導のための指導マニュアルは 91.8%で「ない」と回答、しかしながら、「手引き」を使っているのは 37.7%のみであった。「手引きのどの部分を使うか？」の設問には食物アレルギー、アトピー性皮膚炎、発症予防を使うと回答した自治体が多く、実際の指導と一致していた。「手引き」が保健指導に役立つか？の設問には「とても役立つ」「役立つ」を合わせると、すべての項目で 90%を越えていた。とくに、「とても役立つ」は食物アレルギー、アトピー性皮膚炎、発症予防、保健指導用リーフレットで多かった。「手引き」は保護者から質問を受けることを想定して、Q&A 方式で記載しているが、この形式が使いやすいか？の設問には、「大変使いやすい」「使いやすい」

を合わせて、89%であった。

「手引き」を使わない理由として、もっとも多かったのは「存在を知らなかった」であり、周知不足が考えられた。

以上の結果をもとに、「手引き」を改訂した。評価が高かった Q&A 方式を踏襲して、参考情報へのアクセスを容易にする QR コード追加、要望のあった新たな Q&A 追加、イラストの更新、新情報の追加などを行った (図 2, 3)

図 2 改訂版「手引き」表紙



図 3 裏表紙



図 4 サンプルページ

食物アレルギー

Q1:食物アレルギーと診断された乳児に授乳している母親の食物除去は必要ですか? (年代区分:②、③)

A:授乳中の母親も乳児の原因食物の除去が必要となることはあまり多くありません。除去が必要な場合でも短期間で解除できることが多いです。

解説:母乳栄養や混合栄養では、湿疹があるような一部の乳児では母親の食事内容が食物アレルギーの症状と関連していることもあります。このような場合、母親の食物除去が必要となることがありますが、乳児により除去範囲は異なり、短期間で解除できる場合が多いです。また加工品(パンやお菓子など)は食べてよいことが多く、乳児が離乳食を開始するころには解除できることが多いので、母親が過度な食物除去や長期的に食物除去をしている場合には、医師に除去の必要性を確認してもらいましょう。



参考資料:

- 食物アレルギーの診療の手引き 2020
<https://www.foodallergy.jp/wp-content/themes/foodallergy/pdf/manual2020.pdf>
- 食物アレルギー研究会 「食物アレルギーの栄養食事指導の手引き Q&A」
<https://www.foodallergy.jp/faq/>



Q2:食物アレルギーは血液検査で診断できますか? (年代区分:②、③、④)

A:血液検査だけで食物アレルギーを診断することはできません。

解説:食物アレルギーの診断は、原則として、原因と考えられる食物を食べてアレルギー症状が誘発されること、その食物に対して感作されていることの両方で診断します。

血液検査では、食物特異的 IgE 抗体を検査して、感作を確認することができます。値が高いほど食

物アレルギーである可能性は高まりますが、必ずしも 100% ではありません。検査する食物の種類、調理方法の違い、年齢などにより、検査結果の解釈が異なります。特異的 IgE 抗体が陰性でも食物アレルギーと診断されるタイプもあるため特定の食物を食べてアレルギー症状が誘発されるときには医師に除去の必要性を確認してもらいましょう。

参考資料:

- 食物アレルギー研究会 「食物アレルギーの栄養食事指導の手引き Q&A」
<https://www.foodallergy.jp/faq/>
- 環境再生保全機構「ぜん息予防のためよくわかる食物アレルギー対応ガイドブック 2021 改訂版」
https://www.erca.go.jp/yobou/pamphlet/form/00/pdf/archives_31321.pdf
- 日本小児アレルギー学会 「食物アレルギー診療ガイドライン 2021 ダイジェスト版」第 8 章 診断と検査
https://www.jspaci.jp/guide2021/jgfa2021_8.html



Q3:どのようなときに専門の医療機関を受診すれば良いでしょうか?

(年代区分:②、③、④)

A:乳児の湿疹が治りにくい場合、複数の食物除去が必要な場合、栄養食事指導が必要な場合、原因食物の診断が難しい場合や原因不明のアナフィラキシーを繰り返す場合には専門医療機関への紹介が必要です。また、食物アレルギーの正確な診断および除去解除を進めるために食物経口負荷試験を行っている医療機関を受診する必要があります。

解説:乳児のかゆみを伴う治りにくい湿疹と食物アレルギーは関係することがあります。通常のスキンケアやステロイド外用療法にて湿疹が改善しない場合や良くなったり悪くなったりを繰り返す場合には食物アレルギーの関も考えて専門の医療機関を受診すると良いでしょう。また、食物アレルギーの正確な診断や除去解除を進めるためには食物経口負荷試験を受ける必要があります。血液検査(抗原特異的 IgE 抗体値)や皮膚プリックテストが陽性という理由だけで不必要な除去を指示されている場合や除去解除が進まない場合には、食物経口負荷試験を行っている医療機関を受診すると良いでしょう。その他、診断の見直しや栄養食事指導が必要な場合にも受診を勧めます。

参考資料:

- 食物アレルギーの診療の手引き 2020
<https://www.foodallergy.jp/wp-content/themes/foodallergy/pdf/manual2020.pdf>



今後の活用、普及のために、全国都道府県に冊子を送付、アレルギーポータルより自由にダウンロードできることを通知した。

<https://allergyportal.jp/bookend/guideline/bg191025-16/>

D 考察

アレルギー疾患は小児期早期に発症して、発現の形式を変化させながら、生涯にわたって持続することが多く、アレルギーマーチと言われているが、乳幼児期はその最上流にあり、この時期での正しい保健指導はたいへん重要である。「小児のアレルギー疾患保健指導の手引き」は妊娠中から幼児期に至るまでの重要な時期において、指導すべきこと、あるいは妊産婦、母親が不安に感じていることについて、Q&A方式でわかりやすく解説されている。本研究では全国の自治体に利用状況の調査を行ったが、「手引き」を使用している自治体では概ね好評であり、活用されていることがわかった。しかしながら、使用していない自治体は「存在を知らなかった」と回答しており、周知に課題が残ることが明らかとなった。

調査結果をもとにした改訂作業では、より完成度を高めて、使いやすい形を目指し、2023改訂版を発刊することが、今後の継続して利用促進を図っていきたい。

E 結論

「小児のアレルギー疾患保健指導の手引き」活用状況を調査、「手引き」改訂に反映させて2023改訂版を発刊した。この新しい「手引き」がアンメットニーズに応えるためのツールとして活用が進むことを期待する。

F 健康危険情報

なし

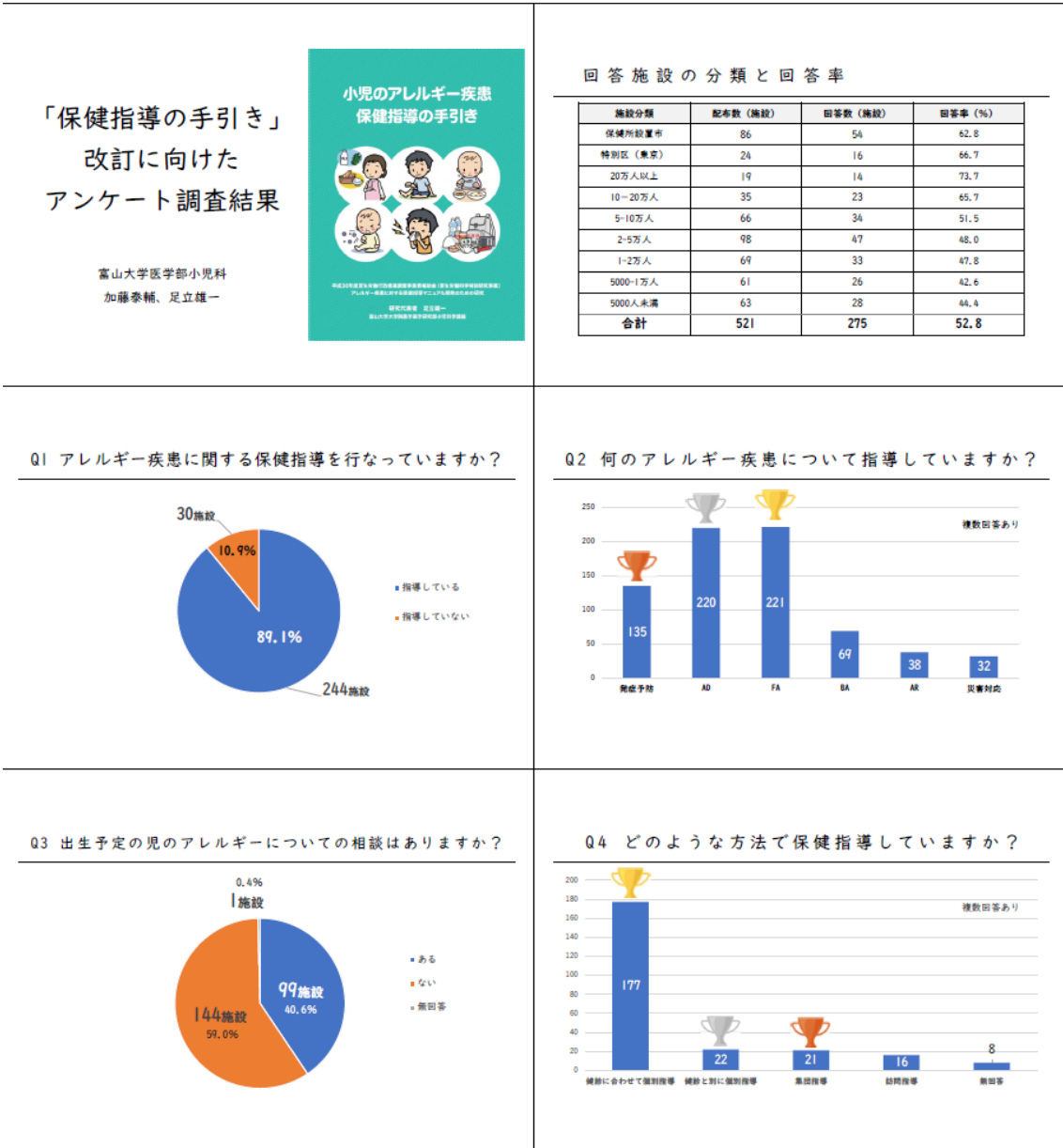
G 研究発表

なし

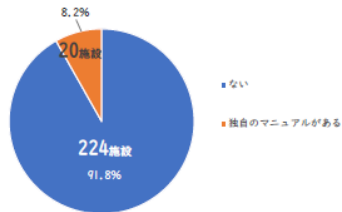
H 知的財産権の出願・登録状況

該当なし

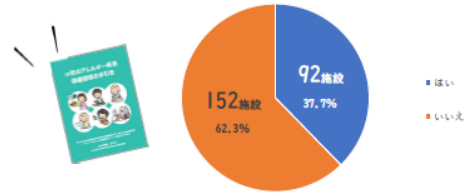
(資料4) 「小児のアレルギー疾患保健指導の手引き」 利用状況調査結果



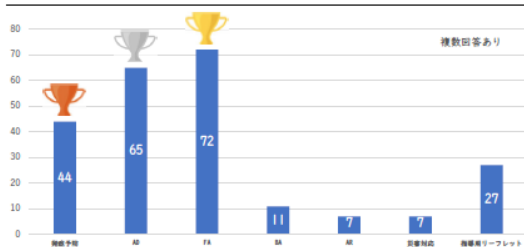
Q5 アレルギー疾患の保健指導のための指導マニュアルはありますか？



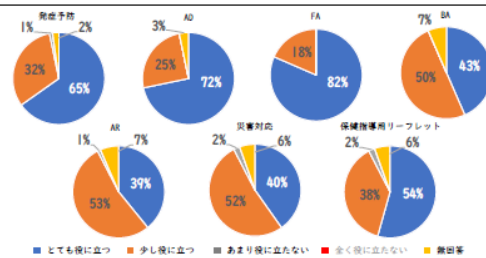
Q6 「小児のアレルギー疾患保健指導の手引き」を使っていますか？



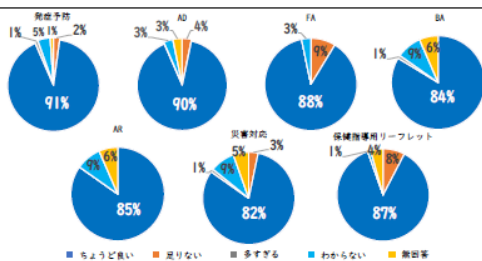
Q7 「手引き」のどの部分をよく使いますか？



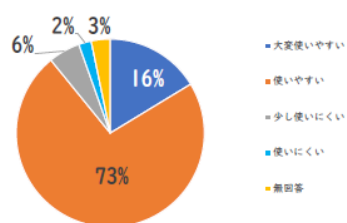
Q8 「手引き」の内容は日頃の保健指導で役に立ちますか？



Q9 手引きで示された項目数は保健指導を行うのに十分ですか？

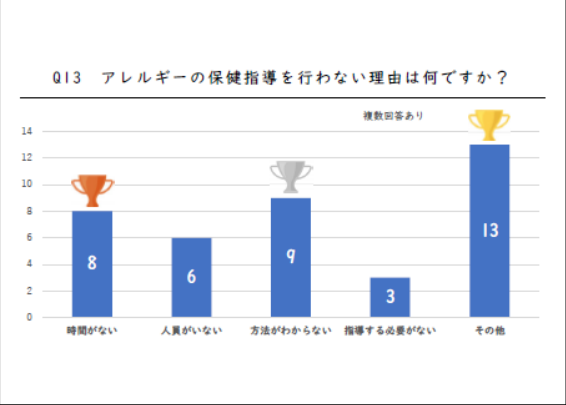


Q10 「手引き」のQ & A形式は使いやすいですか？





- Q11 「手引き」の改訂への要望はありますか？（自由記載）
- ✓石けんの質が重要と感じています。スキンケアに關してもう少し詳しく記載されているといい
 - ✓軟膏塗布の必要量や、適切な紫外線対策に關する記述が曖昧で指導に使いにくい
 - ✓新生児用のアレルギー対策リーフレットがあるといい（特に沐浴やその後の保湿について）
 - ✓血液検査で陽性の際の、その後の対応を詳しく知りたい
 - ✓離乳食の進め方（特に離乳）があると良い
 - ✓食物アレルギーの代替食について一覽があると良い
 - ✓気管支喘息の項目で、転居に關する記述が曖昧で指導に困る
 - ✓災害への備えて、各疾患ごとに準備するものを表にまとめていただけると分かりやすい
 - ✓案内サイトへのアクセス方法がQRコードだと良い
 - ✓リーフレットはイラストではなく写真の方がわかりやすい
 - ✓現在の年齢ごとの他に、疾患ごとのリーフレットがあると良い
 - ✓私たち専門職だけでなく、一般の人がこの手引きにアクセスできるようになると良い



- その他、「手引き」への改訂へのご意見（自由記載）
- ✓地域の特性もあり、統一したマニュアルでは対応できないことがある
 - ✓すべての自治体に送付されていますでしょうか？当市には届いていないかと…
 - ✓内容が分かりやすく、活用させてもらっています
 - ✓ちょうど良い分量だと思います
 - ✓独自マニュアル作成の際の参考文献として利用させていただいています
 - ✓小児科でも治療や指導が異なるため、どのように指導したらよいか意見が欲しい
 - ✓最新情報が出るたびに改訂版をお願いします